

土師器甕を加工した甗

－ 渡来文化受容の一事例 －

寺井 誠

要旨 5世紀前半頃の日本列島は、朝鮮半島からさまざまな新文化を受け入れ、自らの文化を変えていく時代である。甗もそのひとつで、朝鮮半島の技法・器形を忠実に真似ることによって導入するのであるが、ごく一部に、煮炊きに使用われていた在来の土師器甕の底部に蒸気孔を穿ち、甗に加工した事例がある。このような甗は大阪府茨木市の安威遺跡、奈良県御所市の南郷千部遺跡、岡山市の高塚遺跡で出土している。3遺跡では朝鮮半島的な文化要素は多分に見られるものの、甗については器形・技法が忠実に採用されたものが少ないという共通点があり、何らかの理由で甗が必要になった際の臨時的措置と考える。これは新文化の導入を我流で試みたものの、普及しなかった一例でもあり、渡来文化の受け入れに際しての試行錯誤の過程を示している。

はじめに

甗は蒸すという用途をもつ専用器種である。古墳時代中期に朝鮮半島から竈とともに近畿地方などに局地的に伝わって、やがては全国的に拡がるという、渡来文化を代表する土器でもある。弥生時代や古墳時代前期には鉢や甕の底部中央の1個所に孔を穿った甗はあったが、古墳時代中期に導入されたものは、底部に蒸気孔が複数あり、より多くの蒸気を通すことができる工夫がある。

このような多孔の甗については、伝わった当初は竈も普及していなかったために、使う習慣がなく、

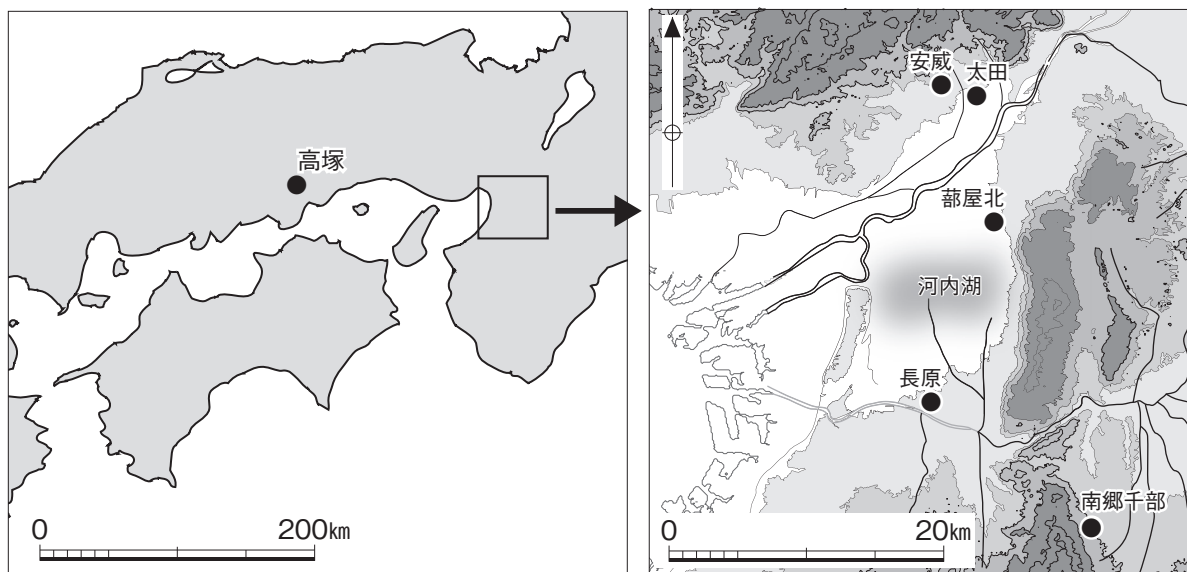


図 1 取り上げる遺跡の位置

同時に作るのにも慣れていなかったことであろう。よって、導入当初の甗は朝鮮半島の甗の作り方をそのまま真似るということで作り上げており、それゆえに故地の特徴をよく留めている。初期の甗には全羅道や忠清南道のものを原型とするものが多いということは、酒井清治氏などの先行研究（酒井1998）で指摘されている通りであり、拙稿（寺井2012）でも述べたことがある。

しかし、導入期である古墳時代中期の甗の中には、粘土で初めから作ったのではなく、既存のものを加工して作った事例がある。今回紹介するのは、在来文化の調理道具の主流である土師器甗を加工して作った甗であり、安威遺跡（大阪府茨木市）、南郷千部遺跡（奈良県御所市）、高塚遺跡（岡山市）で出土している（図1）。いずれも甗の底部に二次的に孔を複数穿って蒸気孔としている。甗という新しい器種が定着するまでの一過程を見ることができる興味深い事例である。以下、各事例の紹介をしながら、その意味について若干の考察を加えた。

なお、本稿で取り上げる土器についてはすべて番号を付与し、例えば図2の1の土器を文中で記す場合は「**2-1**」とゴシック体で表記することにした。

1. 事例紹介

1) 安威遺跡（図2）

安威遺跡は大阪府茨木市安威に所在する。北摂山地の南に派生する段丘上に立地し、安威川の右岸に当たる。遺跡の西側には將軍山古墳群、安威川の対岸には太田茶臼山古墳や太田遺跡がある。

この遺跡は1997～98年度の発掘調査で、竪穴建物跡35棟をはじめとする5世紀初頭から6世紀前半にかけての遺構の数々が発見され、竈付の住居14から当該の甗が出土した。共伴遺物には甗、高杯、そして（初めから甗として作られた）甗といった土師器のほか、ON231型式に位置付けられるという須恵器杯身や器台が報告されている（**2-2～9**）。

ここで紹介する甗（**2-1**）は、布留式系の甗を加工したもので、口径が15.5cm、残存器高が23.1cmある。口縁端部は肥厚し、内傾する面をもつ。胴部は球形で、外面はハケ調整で、内面はヘラケズリが施されている。器壁は肩部で3～4mm程度、底部に至っては2mm程度と非常に薄い。蒸気孔は直径が1cm弱の円形で、外側から内側に向かって、穿孔具を用いて穿たれていて、内面では孔の縁が剥離している。底部が一部欠損しているため、蒸気孔全体の配置はわからないが、残存している範囲では外周が直線的な配置に見え、甗でよく見られる同心円状の配置ではないようである。時期については、報告書ではⅢ期という時期に位置付けられ、5世紀前半から中頃に当たるとされている。

なお、当遺跡では朝鮮半島の技法や器形を忠実に留めた甗は見当たらない。**2-1**と共伴して出土した**2-2**については、外面ハケ調整で、土師器として作られたものである。また、住居25で出土した**2-10**は、ヘラのような道具を使って長径2cm以下の円形もしくは楕円形の蒸気孔を複数穿っている。一般的に土師器として普及する甗とは異なるが、観察した限りでは把手が付いた痕跡が見当たらない。また、安威川を挟んで対岸に位置する太田遺跡では、**2-11**のような多孔の甗が出土している。**2-10**とは異なり把手は付けられていて、ハケ調整が施されている。**2-11**については、実物観察はしていないが、

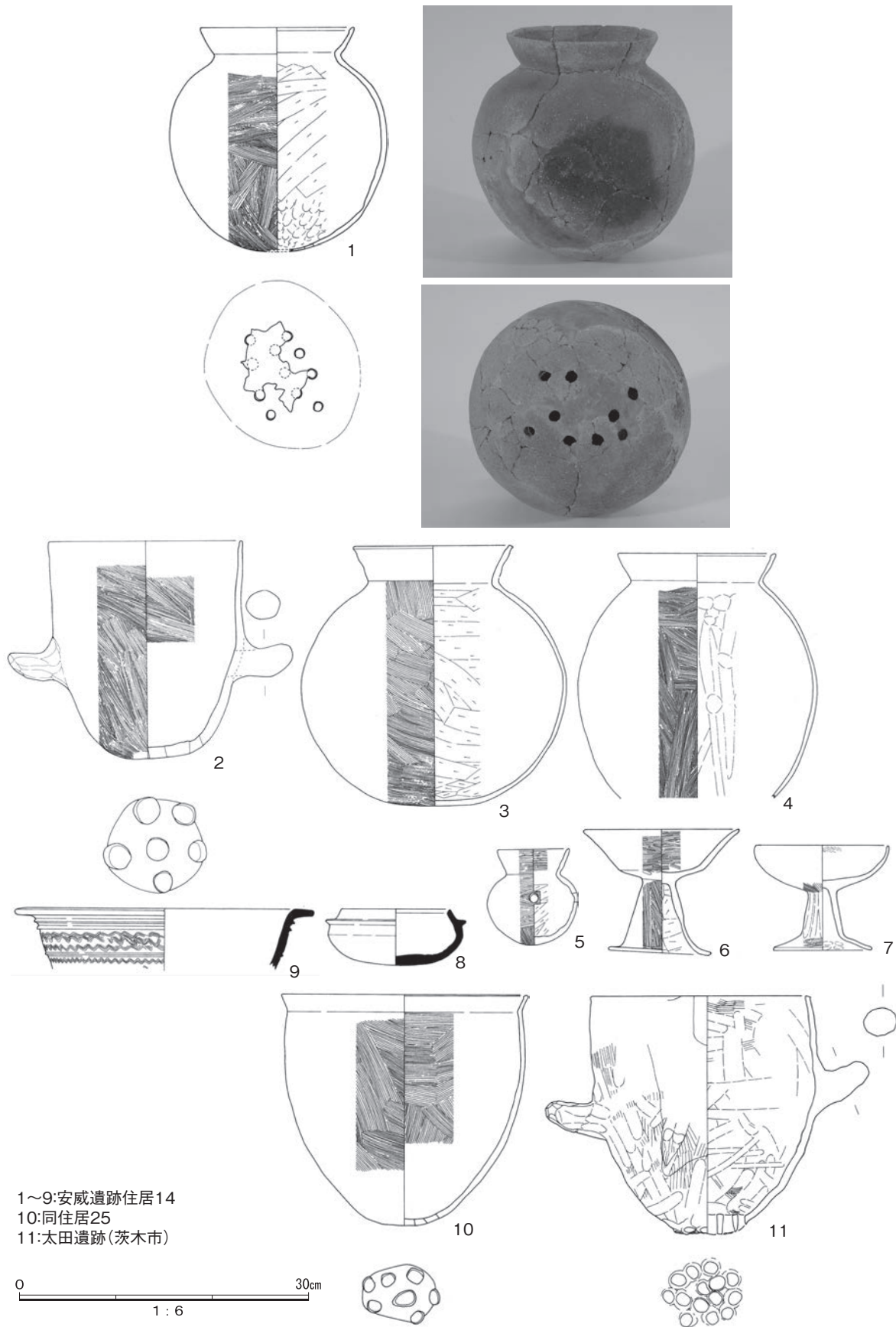


図2 安威遺跡出土の加工甕および関連資料

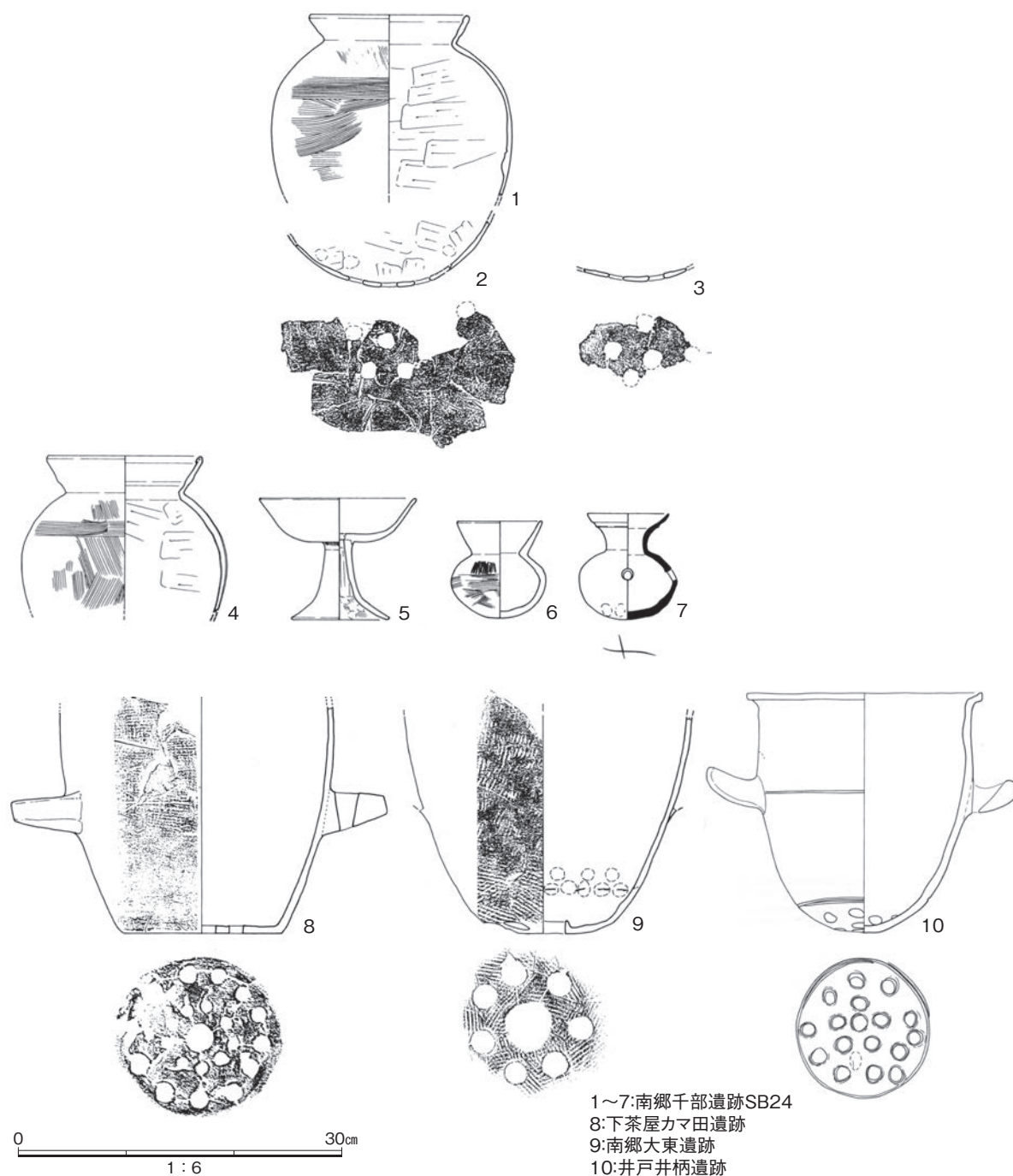


図3 南郷千部遺跡出土の加工甕および関連資料

器形や蒸気孔のあり方は慶尚南道昌原市や金海市あたりで出土しているものと共通するよう思える。

2) 南郷千部遺跡 (図3)

奈良県御所市の南郷遺跡群のひとつである。遺跡群については、坂靖・青柳泰介 (2011) で簡潔によく整理されているため、それを参照しながらまず遺跡群の概要を記す。

遺跡群は奈良盆地の南西部に位置する。西側には金剛山、東側には大和川の支流に当たる葛城川がある。近隣には室宮山古墳や巨勢山古墳群がある。遺跡群は複数の地区に分かれ、「王の高殿」と称さ

れる建物が見つかった極楽寺ヒビキ遺跡、祭祀的な導水施設のある南郷大東遺跡、武器工房があったと推定される南郷角田遺跡などがある。また、遺跡群全体的には朝鮮半島系土器や大壁建物など渡来色が強いことでも有名である。なお、ここで取り上げる南郷千部遺跡は、南郷田鶴遺跡や下茶屋カマ田遺跡、佐田柚ノ木遺跡とともに、竪穴住居が集まっているエリアとされている。

該当資料は、南郷千部遺跡のSB02から出土した。共伴する遺物には土師器甕や高杯と、須恵器甕と壺がある（**3-4～7**：奈良県立橿原考古学研究所2000）。

この甕は、布留式系の甕を加工したものである。接点がないため3片に分けて実測図が示されているものの、報告書で指摘されている通り同一個体と考えられる（**3-1～3**）。図上復元したものは口径約14cm、器高約24cm、胴部最大径約22cmとなり、胴部は若干長めの球胴である。蒸気孔はいずれも焼成後であり、直径が1.5cm前後の円形で、確認できる限りで10個ある。複数の破片に分かれるため、蒸気孔の配置に規則性があるのかどうかはわからない。外面にはハケ調整、内面にはヘラケズリが施され、器壁は肩部で3mm、底部で3mm程度と薄い。なお、底部外面には煤が付着している。

時期については、甕の原型の甕が非常に器壁を薄く仕上げている点と、初期須恵器が共伴しているということから5世紀前半と推定する。

なお、南郷遺跡群の他の地点では、朝鮮半島の故地の特徴を有した甕が出土している。**3-8**は忠清南道・全羅道の百済・馬韓もしくは慶尚南道西部、**3-9**は京畿道の百済、**3-10**は慶尚道の新羅・加耶に故地が求められるものと思われる。

3) 高塚遺跡（図4）

岡山市北区に所在する。遺跡は岡山市の西部にあり、足守川と砂川が合流する地点に位置する。弥生～古墳時代を主とした集落遺跡で、貨泉や銅鐸が出土していることでも有名であり、古墳時代中期では新羅系・百済系の陶質土器が出土している（岡山県教育委員会2000）。

該当資料は、高塚遺跡角田調査区において検出された、造り付け竈を持つ竪穴住居185から出土した。共伴する遺物には、土師器甕（**4-3**）や高杯（**4-4**）に加え、多孔丸底の甕（**4-2**）があり、陶質土器と思われる表面無文の壺（**4-5**）や縄文タタキが施された壺（**4-6**）などもいっしょに出土している。

この甕（**4-1**）は、布留式系の土師器甕を加工したもので、同じような器形の甕は**4-7**など複数の出土例がある。口径が16.2cm、器高が28.0cmあり、胴部は球胴である。外面はハケ調整、内面はナデで仕上げられ、底部にはユビオサエが残っている。底部の器壁の厚さは5～6mmである。蒸気孔は円形で直径が1.5～1.8cmと比較的大きなものが7個、直径1.1mmと小さいものが3個ある。配置については、比較的直径が大きい円孔は、中心に1個、その周囲に6個という配置をしており、小さな孔は周囲に巡る孔の間に追加で穿たれたように見える。

時期は報告書では「古墳時代中期Ⅰ」に位置付けられ、須恵器が出現するころに当たる。甕の原型となる甕の特徴や共伴遺物から、概ね5世紀前半に収まるものと思われる。

なお、いっしょに出土している甕（**4-2**）については、小さな蒸気孔が多数穿たれるという点では朝鮮半島に共通するが、把手がなく、内面ヘラケズリは土師器の技法である。竪穴住居132から出土した

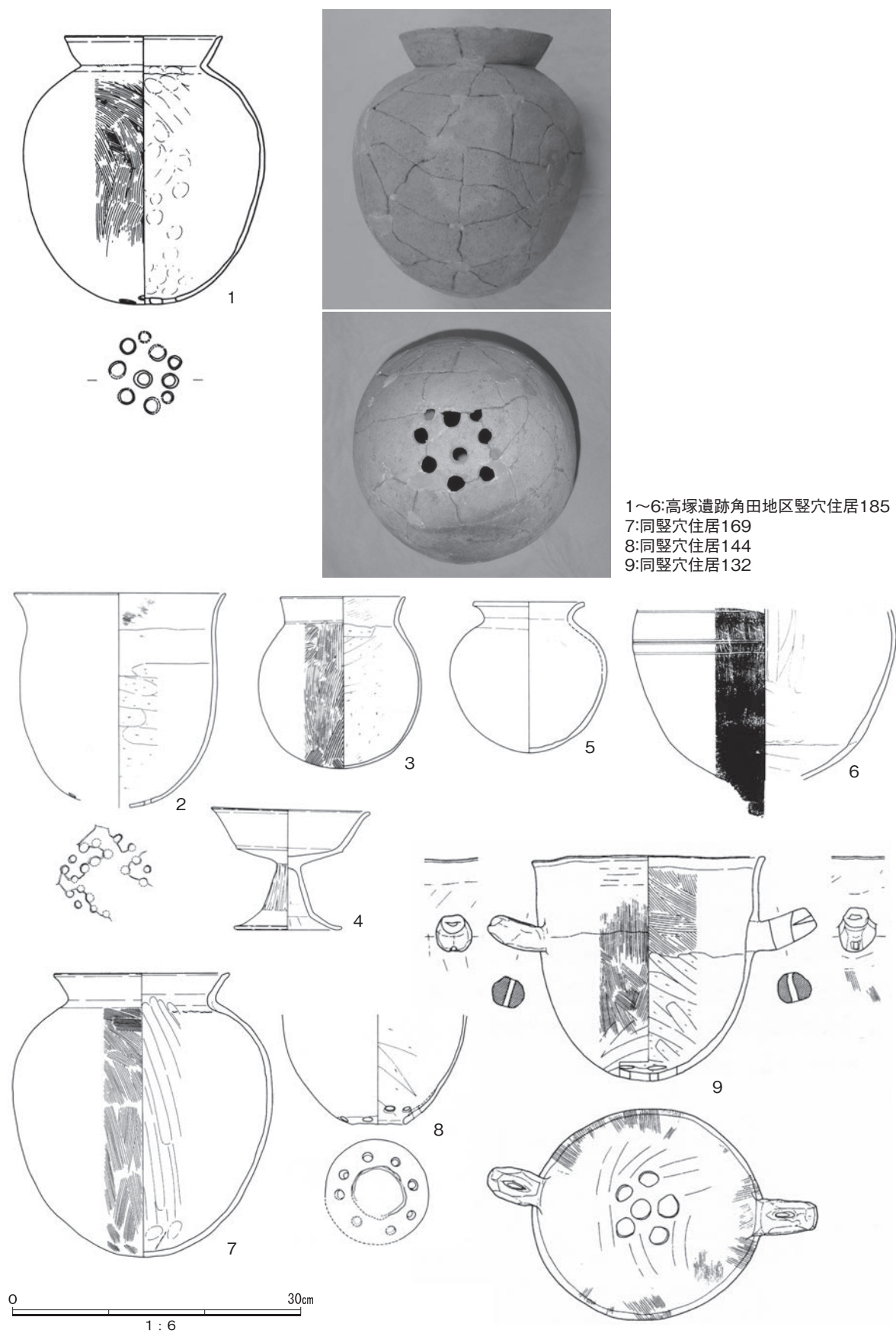


図4 高塚遺跡出土の加工甑および関連資料

4-9は、底部が丸底で、中心にひとつ、周囲に5つの蒸気孔が穿たれる。外面はハケ調整、内面下半はヘラケズリで仕上げられる。把手の上面には切込があるという点は朝鮮半島の特徴をとどめているが、ハケ調整やヘラケズリは土師器の技法である。4-8は底部のみの破片であり、全体がわからないが、中央に直径5 cm程度の円孔の周囲に、直径1 cm程度の円孔を巡らす、慶州地域に類例のある蒸気孔の配置である。残存部が少ないため、即断は避けるが、故地の特徴を残している可能性がある。

2. 若干の検討

ここで上述したような土師器甕を加工した甗について、情報を整理しておきたい。

まず、本稿で紹介した3遺跡について共通するのは、いずれも陶質土器を含む朝鮮半島系土器や初期須恵器が出土する遺跡であるということである。加えて、安威遺跡や高塚遺跡の竪穴建物は、造り付け竈の保有率が高い。また、原型となる土師器甕そのものや共伴遺物を基にした時期比定や、異なる地域同士の細かな時期比較は難しいが、概ね5世紀前半代と考える。安威遺跡では5世紀前半代の竪穴建物のほとんどに造り付け竈があり、高塚遺跡についても5世紀前半代の竪穴建物の半分程度に竈が確認されている。よって、朝鮮半島からの渡来文化の受容が比較的早い方であったといえる。しかし、前述したように、南郷遺跡群では朝鮮半島の器形・技法で作られた甗は出土してはいるものの(図3)、安威遺跡や高塚遺跡では出土していない点は指摘できる。

時期に差異はあるものの、長原遺跡(5世紀前半)や葦屋北遺跡(5世紀後半)と比較してみると、器面にタタキメを残すような朝鮮半島の製作技法で作られた甗が少なくとも10個体以上は出土している(図5)。いずれも胎土から見て、朝鮮半島からの搬入品でないことは確かであるので、遺跡内もしくは近隣で作られたものであり、これらの遺跡では甗の製作技法を忠実に習得できる環境にあったといえる。特に葦屋北遺跡では、土製の無文当て具(5-5)が出土していることから、遺跡内で朝鮮半島の技法で土器作りが行われていたことがうかがえる。

中久保辰夫(2009)で指摘されているように、この時期は新来の文化を積極的に受容する集落(長原遺跡)がある一方で、在来集団が徐々に新来の文化を受け入れた集落(南郷遺跡群・安威遺跡)もある。安威遺跡、南郷千部遺跡、高塚遺跡については、渡来文化の受容度に差異はあるものの、後者に位置づけられ、朝鮮半島の技法や器形を積極的に取り入れた甗が出土していない、もしくは少ないという点で共通する。

在来の土師器を加工した甗は、このような生活環境の中で生み出されたものである。初めから甗を作らず、既存物を加工して甗にするというありさまは、非常に臨時的措置の色彩が強いといえる。竈が普及して、甗が必要になったものの、周囲に見本となるような甗が存在しなかったために、既存の煮炊き具に孔をあけたのであろうか。また、急に甗が必要になった要因は何だったのであろうか。祭祀などで急に必要になったため、即席で作ったのであろうか。具体的な要因を論証するのは事例が少ないため困難であるが、斉一的には説明できない個別の事情があったものと思われる。

なお、このような甕を加工して作られた甗が、甗として使用に耐えられたのであろうか。いずれも布留式甕の伝統を引いていることから器壁が薄く、内面ヘラケズリがされた安威遺跡で2 mm程度、南

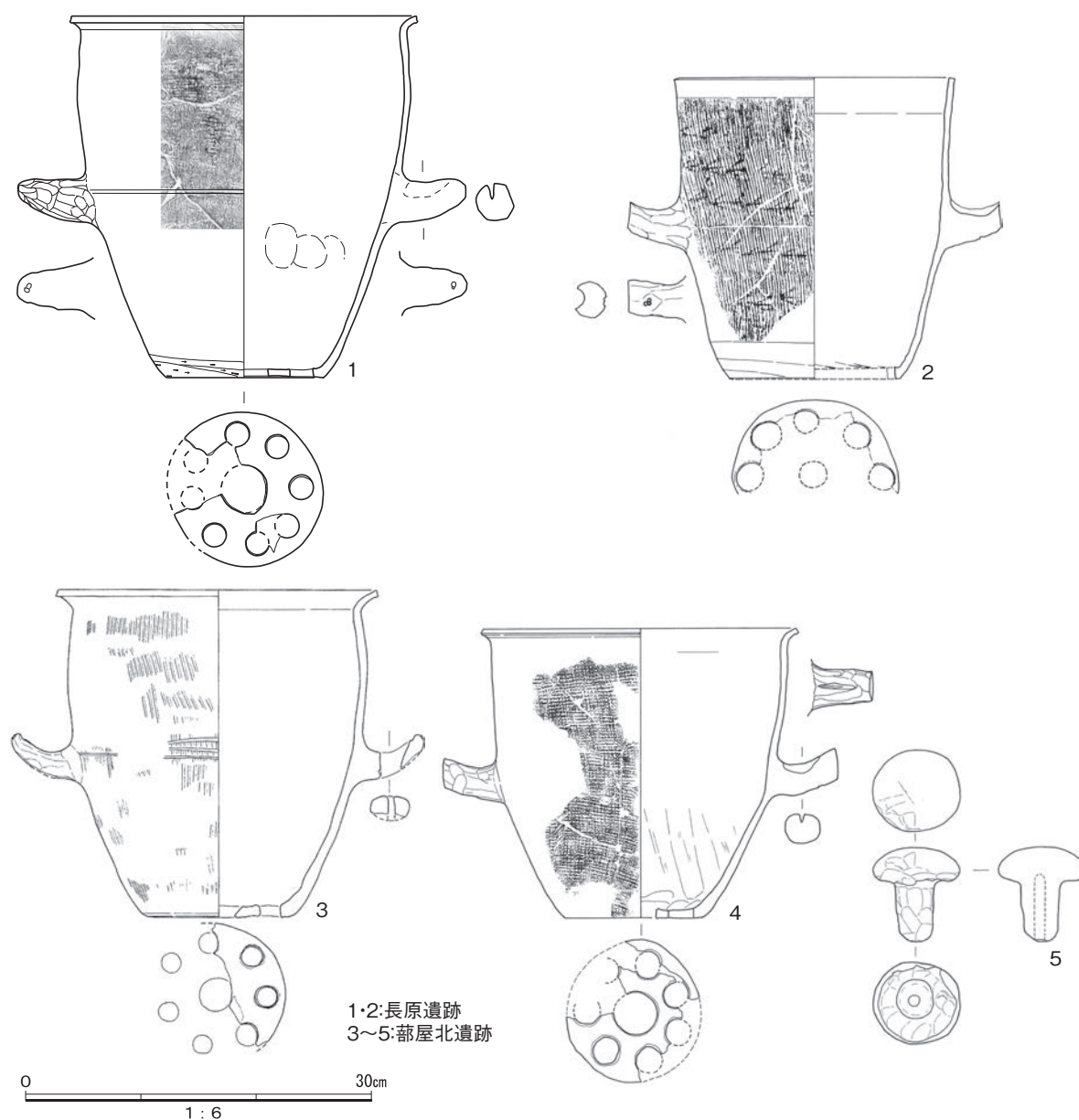


図5 長原遺跡および部屋北遺跡出土甗および関連資料

郷千部遺跡で3mm程度、ヘラケズリがされていない高塚遺跡で5～6mmである。発掘調査で出土したものであるため、使用中の破損なのかどうかはわからないものの、いずれの底部も割れていて、一部は欠失している。この薄い器壁に蒸気孔を穿つのであるから、さらに底部の耐久性が減ずるのは容易に想定できる。

最後に、このような土師器甗を加工して作った甗は、管見に及ぶ限りでは、この3例のみである。ある意味、新文化の導入を我流で試みたものの、うまくいかなかったので普及しなかった一例であるともいえる。

おわりに

以上、安威遺跡・南郷千部遺跡・高塚遺跡で出土した、在来の甕を加工して作られた甕について紹介し、若干の検討を行った。いずれも何らかの理由で急に甕が必要になり、既存物を加工したと推測する。ただ、このような甕は決して普及することではなく、単発的な事象で終わってしまったのである。

古墳時代中期は、須恵器生産、鉄器生産などに見られるように、朝鮮半島からの新技術や新しい生活様式を積極的に受容しようとした時期である。その過程では、好みが合致しなかったために受け入れなかったり、情報不足や技術力の不足により受け入れることができなかったりしたこともある。このような事例はおそらくたくさんあったであろうが、考古学の研究においては、文化変化の主流ではないためあまり取り上げられることもないように思われる。本稿では事例紹介と若干の検討に終わったが、各地の個別事例を見ていくことによって、地域的な好みや受容に対しての個性などが見えてくるものと期待し、今後の課題としておきたい。

謝辞

本稿の基礎となる資料調査では、大阪府教育委員会の藤田道子氏、小浜成氏、奈良県立橿原考古学研究所の市村規美氏(当時)、岡山県古代吉備文化財センターの尾上元規氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。また、本研究は平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(C)25370902「日本列島における出現期の甕の故地に関する基礎的研究」)の助成を得た。

なお、図2、図4に掲載した遺物写真は筆者が撮影したもので、それぞれ大阪府教育委員会、岡山県古代吉備文化財センターより掲載許可を頂いた。

参考文献

大阪府教育委員会2000『安威遺跡』

大阪府教育委員会2010『葎屋北遺跡Ⅰ』

岡山県教育委員会2000『高塚遺跡 三手遺跡2』

酒井清治1998「日韓の甕の系譜から見た渡来人」：『檜崎彰一先生古希記念論文集』 真陽社、27-38.

櫻井久之1998「鳥足文タタキメのある土器の一群」：『大阪市文化財協会研究紀要』創刊号、21-31.

寺井誠2012「長原・八尾南遺跡出土の甕の系譜」：『大阪歴史博物館研究紀要』第10号、19-39.

寺井誠2014「甕の観察点-長原遺跡で出土した古墳時代中期の資料の検討を基に-」：『大阪歴史博物館研究紀要』第12号、17-29.

中久保辰夫2009「古墳時代中期における韓式系軟質土器の受容過程」：『考古学研究』第56巻第2号、62-82.

奈良県立橿原考古学研究所2000『南郷遺跡群』Ⅳ

奈良県立橿原考古学研究所2003『南郷遺跡群』Ⅲ

坂靖2010「葛城の渡来人～豪族の本拠を支えた人々～」：『研究紀要』第15号 財団法人由良大和古文化研究協会、1-45.

坂靖・青柳泰介2011『シリーズ「遺跡を学ぶ」079 葛城の王都・南郷遺跡群』 新泉社

図の出典

図1：筆者作成。

図2：実測図はすべて大阪府教育委員会（2000）より転載。写真は筆者撮影。

図3：1～7は奈良県立橿原考古学研究所（2000）、8・9は同（2003）、10は坂（2010）より転載。

図4：実測図はすべて岡山県教育委員会（2000）より転載。写真は筆者撮影。

図5：1は寺井（2014）、2は櫻井（1998）、3～5は大阪府教育委員会（2010）より転載。

하지키 항아리를 가공한 시루 －도래문화 수용의 한 사례－

테라이 마코토

5세기 전반경의 일본열도는 한반도에서 다양한 새로운 문화를 받아 들여 자신의 문화를 변화시킨 시대이다. 시루도 그 중 하나인데, 한반도의 기법이나 기형을 충실하게 모방하여 도입했지만 극히 일부에서 취사에 사용된 재래 하지키 항아리(웅) 바닥에 구멍을 뚫어 시루로 가공 한 사례가 있다. 이러한 시루는 오사카부 이바라키시의 아이유적, 나라현 고세시의 난고센부유적, 오카야마시의 타카즈카유적에서 출토하고 있다. 3 유적은 한반도적인 문화요소가 다분히 보이지만, 시루에 있어서는 기형·기법이 충실하게 채용된 것이 적다는 공통점이 있고, 이롭게 하지키 웅에 구멍을 뚫은 사례는, 어떤 이유로 시루가 필요할 때 임시적 조치였다고 생각한다. 이것은 새로운 문화의 도입을 아류로 시도했지만 보급되지 않은 일례이며, 도래 문화의 수용시의 시행착오의 과정을 보여주고 있다.